

7. 下吉野の既婚女性

武田 由紀子

- I はじめに
- II 既婚女性の就業状況
- III 既婚女性が所属する地区組織
- IV 下吉野の既婚女性

I は じ め に

下吉野の女性はよく働く。若いお嫁さんから90歳にもなるおばあちゃんまで体の動くかぎり働く。下吉野では特別は理由がない限り家事、育児に専念するいわゆる専業主婦はほとんどいない。下吉野ではほとんどのひとが家の外の仕事に従事している。また、下吉野には区の婦人会があり、50歳位までの既婚女性はほとんどがそれに所属しており、多忙な毎日を過ごしている。

下吉野では、鶴来や金沢への通勤が可能な圏内に位置していることも影響しているのか、3世代同居や時には4世代にも渡って同居している家が少なくない。3世代以上の同居で一番上（4世代同居は上から2番目）の代の男性もしくは女性が世帯主の場合に限っても11世帯ある。1994年の全世帯数は52なので、3世代以上の同居の割合は高いと言えよう。その場合の世帯主の年齢は60歳代か70歳代で、その妻たちは50歳代後半～70歳代である。嫁の年代は40歳代が6人、30歳代が3人、20歳代と50歳代が1人ずつである。区の婦人会は30～40歳代でほぼ構成されている。このように対外的には30～40歳代の嫁の方が各家の代表として積極的に主婦の役割を果たしていると言えよう。50歳代で婦人会に所属している人は1人しかいないが、50～60歳代の女性は自主的に大門園にボランティアに行ったり、選挙の折には何日も事務所に詰めて手伝う。村の事情もよく分かっているので頼りにされるのだろう。このように下吉野の既婚女性たちは年齢によってある程度の役割分担を行っているように思われる。

本稿ではまず下吉野の既婚女性全般の就業状況について概観し、次に既婚女性が所属する地区組織のしくみ及び活動について述べ、最後に下吉野の既婚女性のありかたについて考察してみたい。

II 既婚女性の就業状況

現在下吉野在住の女性は全部で109人である。そのうち既婚女性は78人である。この既婚者で家の外の仕事をもっている女性の年齢の上限は70歳代なので、ここでは20歳代から70歳代の既婚女性を対象として扱う。

20歳代から70歳代の既婚女性は67人である。67人中43人が家の外に何らかの仕事を持っており、

残りの24人は現在仕事を持っていない。この24人は小さい子供を抱えている20歳代（1人だけ30歳代）、そして定年などでリタイアした60歳代、70歳代で構成されている。逆に30歳代、40歳代、50歳代は1人を除いてすべて何らかの職についている。

1. 北陸ニットでの勤務

既婚女性の職場は様々であるが、内職やパートも含め北陸ニットで働いている人は12人である。この北陸ニット工業株式会社は、過疎対策の一貫として1971（昭和46）年に下吉野に誘致された。主に紳士靴下を製造している（『吉野谷村小百科事典』による）。北陸ニットの事務を勤める女性の話では、1971年当時は全員で60人位が勤めており、そのうちの半数が下吉野の女性であった。このとき彼女たちは勤めに出るのは初めてという人ばかりだった。その後の10年間で工場が機械化されていき、就業人数も徐々に減っていった。当初40歳代位で入った人は、孫が誕生するとお嫁さんに入れ替わりになっていった。10年後の1981年頃には下吉野の人は約12人になっていた。現在44人が勤務しており、下吉野からのフルタイム勤務は6人となっている。ここ数年は、かつて40歳代で勤めはじめた人が定年になり、1人、2人と辞めていくが、退職しても内職を続ける人はいる。ニットに勤めるのは中年の人ばかりで若い世代は入ってこず、下吉野の6人も40歳代と50歳代のみである。

工場の誘致には、婦人たちが女性が働く場が欲しいと訴えていたことが大きな要因となっていたという。それまで下吉野では勤めたことがない人がほとんどで主に農業に従事していた。1970年から75年にかけての30～59歳の女性の農業従事者の減少（33人→12人）は、北陸ニットへの就職の影響によるであろうと思われる。同じ時期、農家としては専業と第1種兼業が併せて7軒減少しているのに伴い、第2種兼業が7軒増加している（『農業センサス』による）。これは女性の農業従事者が減少し現金収入を得るようになり、家の総収入における農業の比重が小さくなったことを示しているのだろう。

2. 北陸ニット以外への勤務

現在北陸ニット以外のところで勤めている既婚女性は全部で31人である。そのうち金沢など遠方で働く人は8名で、フルタイムの勤務である。その半数が20歳代から30歳代前半の若い世代で、あとは40歳代3人、60歳代1人である。49歳、62歳の、遠方勤めのうちでは年長の2人はそれぞれ栄養士、看護婦といった専門職である。

下吉野の近辺で勤めている人は14人いる。その内5人が工芸の里でパートタイムで働いている。その他は調理、看護婦、保母、事務など様々である。14人中30歳代後半が2人、40歳代が7人、50歳代が4人、60歳代は1人である。

3. 自 営

自営業で働いている既婚女性は9人である。業種はガソリンスタンド、塗装、土建業、食堂、釣り堀、寺である。土建業、釣り堀、寺は嫁と姑が同じ職場で働いている。姑、嫁の年齢はそれ

ぞれ58歳－30歳、60歳－42歳、52歳－30歳である。あとの3名は40歳代2名、50歳代1名である。

4. 無 職

主婦業以外特に職を持たない人は下吉野では少数派で24人である。無職の40歳代、50歳代はならず、30歳代も1人を除いて皆なにかの職に就いている。無職の既婚女性は、年齢的には、以前は勤めていたが定年や健康の都合で辞めたと思われる60歳以上の人と、小さい子供を抱えて育児に専念せざるをえない20歳代（30歳代も1人）に集中している。現在60歳代、70歳代で、以前は北陸ニットで勤めていたという人はかなり多いと思われる。現在20歳代で無職の人は育児が一段落したら、何か職に就く可能性が全体の傾向から見ても高いと思われる。

5. まとめ

下吉野在住の20歳代の女性は14人である。そのうち既婚女性は6人で、3人が比較的遠方で勤めており、あとの3人は無職である。前者はまだ子供がいない。後者の方は小さい子供がおり、育児が大変な時期である。前者も出産、育児の時期には数年間は一時的に職から退くものと予想される。

現在下吉野に在住の30歳代以上の女性は全て既婚者である。30歳代の既婚女性は6人であり、40歳代～70歳代の年齢別人数に比して約1/2～1/3である。このように30歳代は人数も少なくこれといった傾向も見られないが、どちらかというと言育児中心で20歳代の延長上の感がある。

20歳代から70歳代の中で40歳代の女性の占める割合が最も大きく、26.9%（67人中18人）である。北陸ニットを始め就業先は様々である。遠方で勤める人が3人もいることが目を引く。30歳代、60歳代にもそれぞれ1人いるが、女性が家の主な働き手であるとか専門職といった特殊なケースであった。40歳代の場合、子供はほとんどが中学生以上であり、一番手のかかる時期を脱したことが理由の一つであろう。

50歳代で北陸ニットに勤務している人の中には創業以来という人もいる。40歳代、50歳代には無職の人はいない。

60歳代になるととたんに8割方が無職となる。定年で辞めざるを得なくなったのも理由の一つだろうが、代替わりで主に畑仕事をやるようになる。70歳代で北陸ニットの内職をやっている人は1人暮らしであるなど、特殊な例である。60歳代、70歳代の9人と80歳1人が現在朝市に品物を出している。下吉野の高齢者（特に女性）は畑仕事に非常に精を出す、本人たちは「畑仕事は楽しい」と言っており、労働でありながら、趣味や楽しみといった色合いが強い。朝市もその延長上にあると言えるし、その収入は「おばあちゃんのこづかい」であり、家にはあまり還元されない、表からは省いた。

表－１ 既婚女性の就業状況（1994年）

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	計
北陸ニット（フルタイム）	—	—	3	3	—	—	6
（パート、内職）	—	—	2	1	—	3	6
遠 方（フルタイム）	3	1	3	—	1	—	8
工 芸 の 里	—	—	3	1	1	—	5
そ の 他 近 辺	—	2	4	3	—	—	9
自 営	—	2	3	3	1	—	9
有 職 計	3	5	18	11	3	3	43
無 職	3	1	0	0	12	8	24
既婚女性〔有職＋無職〕	6	6	18	11	15	11	67

Ⅲ 既婚女性が所属する地区組織

下吉野には現在雲龍会、青年団、婦人会、亀寿会、五十路会、壮年団、笑和会、子供会の8つの性年齢別集団がある。そのうち下吉野の既婚女性によって組織されているのが婦人会である。彼女たちは下吉野区の婦人会の会員であると同時にそのほとんどが吉野谷村全体の既婚女性で組織された連合婦人会にも所属する。ここでは各区の婦人会の会長、副会長が代表として全体の委員会に出席し、委員会で決定した内容や連絡事項を下位組織ともいえる各区の婦人会へ伝達する。

また、区の婦人会の携わる活動に公民館分館行事がある。吉野谷村の集落の1つである佐良に村全体の吉野谷公民館があり、ここでは村の住民のための社会教育を行っている。しかし、南北に伸びる吉野谷村の地理的状況に対処して、アクセスのし易さ、各地区の特色を生かすために、旧校下ごとに分館が置かれている。現在吉野谷村には9つの集落があり、小中学校は1校のみであるが、以前は吉野、中部、木滑、中宮の4つの校下に分かれていた。この4つの旧校下の一つである吉野には、現在の上吉野、下吉野、未智の里が含まれる。

まず初めに下吉野の婦人会のしくみ及び活動について、次に連合婦人会について、最後に分館について述べることにする。区の婦人会は連合婦人会、分館と常に関わり合いながら活動している。

1. 下吉野婦人会

現在下吉野婦人会の内部は5班に分かれており、会員数は5人の班が3つ、4人の班が2つで合計は23人である。婦人会の班はかつての区の下位区分である「班」の名残と言われ、現在は便宜上の区分である。婦人会の役員は会長1名、副会長1名、会計1名、保険1名、分館2名から成り立っており、各班から役員1名が選出される。任期は1年である。毎年2月頃に区の婦人会の総会で来年度の新役員が選出され、校下婦人会の方に伝えることになっている。

区の婦人会はこれといって会則のようなものは持たないのではありません。30歳代、40歳代が中心だが、50歳でやめなければならないという規則もない。だいたい1軒から1人会員を出す習慣になっており、同じ家に姑と嫁がいる場合、原則としては若い嫁の方に会員として出てもらうことになっている。

区の婦人会の行なっている行事や仕事はかなり多く、下吉野の生活は裏に表に女性たちの活動によって支えられている感がある。常会はほぼ毎月第1金曜日の午後8時頃から開いている。

資金面に関しては、500円の年会費のほかには、盆踊り、秋祭りの時の花代が主な資金源になっている。花代は区内の諸団体に分割、支給される。まず、亀寿会、五十

路会、壮年団、笑和会、子供会に平等に7,000円ずつ、残りを婦人会、雲龍会、青年団で分割する。花代の総計は毎回異なるが、1993（平成5）年度の秋祭りでは321,000円あり、雲龍会、青年団に130,000円、婦人会に130,000円、その他は7,000円ずつの支給となっている。

2. 吉野谷村婦人会

吉野谷村全体の婦人会は校下婦人会もしくは連合婦人会とも呼ばれる。昔は現在のような村全体の婦人会ではなく、吉野、中宮、中部の3つの地区に分かれており、各地区に会長がいた。1971年それらが統合されて連合婦人会という形になり今にいたっている（『吉野谷村純愛宣言・婦人編』）。上でも述べたように、各区の婦人会と校下婦人会は連携している。子供が小さくて手が放せない場合など特別な場合を除いて、ほとんどすべての吉野谷村の主婦が所属している。下吉野の場合、区の婦人会会員のうち、2名が区の婦人会のみの所属である。この2人は工芸の里に夫と共に最近移り住んだ人達で、小さい子供を抱えている。もとからの集落在住者ではないので、

表-2 下吉野婦人会の年齢構成（1994年）

	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	計
既婚女性人数	6	6	18	11	41
婦人会会員数	2	5	15	1	23

表-3 下吉野婦人会の行事と活動（1993年）

3/	消防訓練
3/27	ねずみ駆除
6/27	家庭内消毒
7/11～8/6	まほろばの踊りの練習
8/7	まほろばの宵（1994年から8/13に日付が固定）
8/15-16	区の盆踊り
9/15	敬老の日 秋祭り
10/3	大門園慰問 研修旅行
1/9	消火訓練
1/16	区新年会
1/20	区の総会
2/10	フードピア事前打ち合わせ
2/12	フードピア手伝い
2/18	総会（役員の引き継ぎ、活動の計画）

〔下吉野婦人会記録（1993年度）による〕

立場が多少異なる。

校下婦人会の委員会は役員と委員から成り立っている。役員には会長1名、副会長2名、書記2名、会計1名、幹事3名がおり、会長は旧校下である市原、中宮、吉野の3つのグループの輪番制で選出される。副会長は、会長以外の旧校下より選出される。また、書記、会計は会長の推薦により決定される。役員の任期は2年となっている。

委員は各区の婦人会の会長、副会長であり、各区の会員を総括し委員会での決定事項を報告することになっている。また、体育委員、広報委員、文化委員に分かれてそれぞれスポーツ教室、文集、文化祭の仕事をする。委員の任期は1年である。

表-4 吉野谷村婦人会の行事と活動
(1993年度)

4/6~15	春の交通安全指導
4/18	リーダー研修会
4/19	献血ボランティア
5/16	サバイバル・ペア・マラソン応援
5/26	婦人会健康教室
5/30	野猿公園開き
6/ 6	花いっぱい運動
6/ 8	スポーツ教室
6/13	大門園ボランティア 白山婦人半日研修
7/ 4	研修旅行
8/ 8	中宮温泉薬師まつり
8/13	村盆踊り大会
9/21~30	村の交通安全街頭指導
10/24	大門園慰問
11/ 3	文化祭軽食堂
12/ 4	懇親会(忘年会)
1/15	成人を祝う会
2/13	大門園ボランティア
3/ 5	第1回吉野谷村社会福祉大会
3/14	新旧委員会
3/23	総会・文集の発行

〔下吉野婦人会記録(1993年度)及び石川県白山麓婦人連絡協議会会報『石楠花』1994による〕

役員と委員による委員会で年間の行事が決定される。委員会は4月に第1回が、10月に第2回が招集され、上半期分、下半期分の行事が決定、討議される。3月の新旧委員会で旧年度の事業報告及び決算報告と新年度の計画案及び予算案が提示され、最後に3月下旬の総会で締め括られる。その他にも必要があれば招集される。会員の年会費は1,000円であるが、老人会とともに婦人会へは役場からの援助もなされる。

3. 吉野谷村公民館吉野分館

分館主催の事業計画は非常勤の分館長と分館主事が決め、村の教育委員会に提出する。教育委員会はそれを査定し、補助金として運営資金を交付する。運営委員は上吉野、下吉野それぞれから3~4名が出て各種行事の運営に携わる。区の婦人会の総会での役員選出のときに公民館の役員2名が必ず選出される。上吉野からも同じく役員2名が選出される。

行事自体は子供を対象にしたものが多く、運営委員をはじめ地区内の大人たち(特に母親たち)が世話をする。

表－5 吉野谷村社会教育及び公民館行事計画（1994年度）

4	月	寺小屋学級（月3回、願慶寺にて）
5	月	寺小屋学級、花いっぱい運動、桜並木の管理、区民運動会
6	月	花いっぱい運動、ふるさと学級
7	月	寺小屋学級、花いっぱい運動、桜並木の管理、ふれあい海水浴
8	月	寺小屋学級
9	月	寺小屋学級、花いっぱい運動
10	月	花いっぱい運動、桜並木の管理、区民パットゴルフ大会
11	月	ふれあいハイキング、ふるさと学級、花いっぱい運動
12	月	ふるさと学級、よい子の集い
1	月	（なし）
2	月	運営委員研修、趣味の会
3	月	運営委員会

（吉野谷村教育委員会による）

IV 下吉野の既婚女性

下吉野では米作りを中心とする農業が主な生業であった。農業が大きな変化を見せるのが1960年から70年にかけてであり、専業農家が13軒から5軒へ、1種兼業も25軒から7軒へ減少している。逆に2種兼業は5軒から30軒への急増を示す。一家の主の家の外での給与労働が家計の主な収入源となっていた。また、1970年代から耕運機などの農業機械が導入され、操作は男性が行った。それにともない、稲作において女性の労働に頼る割合が減った（『農業センサス』による）。

1971年、下吉野に北陸ニットができ、女性も現金収入が得られる場ができた。「現金収入を得られるようになって、生活がかなり楽になった」という肯定的な意見も聞かれたが、「忙しくなった」という声も聞かれる。多くの下吉野の「カアちゃん」たちがニットに働きにいったのは、農業の比重が大きかった上の世代の「嫁は常に暇なく立ち働いているもの」という合意があったことも理由の一つであろう。この世代は近隣の農村からの婚入が多く、実家の親が農作業をしているのを見て育ったり、自分自身勤めに出る前、農業の経験がある。

しかし、ここ20年ほどの間、金沢など遠方からの婚入も増えていった。そういう嫁たちにとって、「とにかく忙しく働いて家にお金をいれればいい」的な考えになじめない部分もあるようだ。しかし、ここでは今も主婦が家にいると「暇そうだ」とか「遊んでいる」と言われる風潮がある。最近のより都市化の進んだ土地から婚入してきた人にとって、村の生活の中で様々な役職を兼ねなければならないのは気苦労なことである。出産、育児に続き、子供が保育園に入るとその役員をやらなければならない。小学校に上がると育友会がありプール掃除など学校の雑用に携わらな

ければならない。その頃になると仕事にもできるようになり、区の婦人会の方にも所属することが期待される。子供が中学生ともなると子育てという点では手がかからなくなるが、家事に関しては姑がいても全般的に嫁の方に振り分けられる。集落では高齢者が子守をする姿も見られたが、子育てに関しても全面的に家の責任領域である。家事の負担は代替わりによっては変化せず、後に新たに嫁が来て出産、育児が一段落するあたりまで続くだろう。それまで、下吉野の女性は忙しく立ち働く。

「本当に落ち着いて他の家のカアちゃんたちとしゃべったりするのは研修旅行の時ぐらいで、普段の婦人会の集会なんかではすぐ帰らないといけないので、あまりしゃべったりしない」とか「バアちゃんたちの方がよく集まっているいろいろしゃべっているので、いろんなうわさをよく知ってる」という声が聞かれるように、村内や近隣からの婚入がほとんどである「バアちゃん」たち同士の結束に比べ、それより若い世代の既婚女性たちは、年齢が若ければ若いほど仲間意識が弱いように思われる。今の高齢の既婚女性のいきいきとした姿の背後には、それを支えるより若い世代の女性たちの姿がある。しかし彼女たちが高齢に達した時同じような姿をとるとは思われな。今の高齢の女性には、同じ土地の出身であること、そして農業という共通の記憶がある。しかし現在の50歳代以下の既婚女性たちは出身も職業もばらばらである。彼女たちは今後どのような老後を迎えるのだろうか。